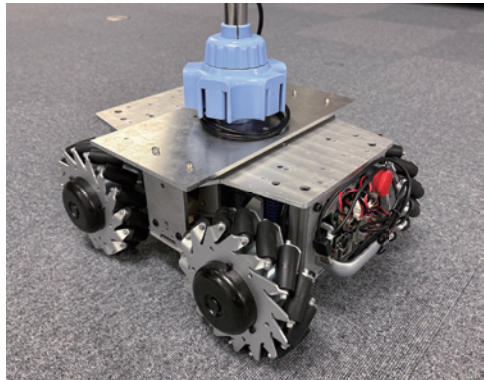
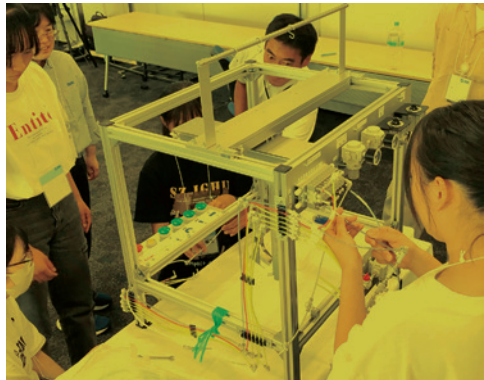
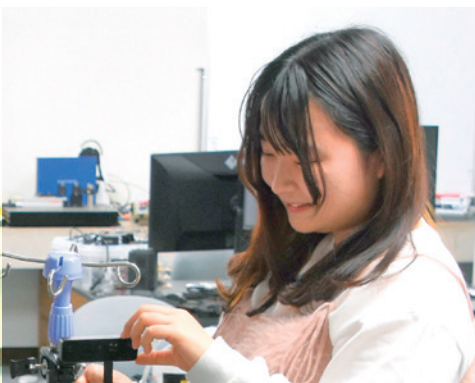


工学部学生へのインタビュー

特集

想いをカタチに。

—奈良女工学部で育む誰かのためのモノづくり—



奈良女子大学工学部には、「小児がん患者の闘病生活を支えたい」という大きな目標に向かって研究に取り組む学生がいます。高校生の頃から一つの研究に取り組む続ける彼女はまさに「工学」を志す女子学生のロールモデルとも言える存在です。今回の取材では、そんな彼女と指導教員の先生に様々な角度から質問を投げかけてみました。皆さんも一緒に「奈良女工学部」の学びの世界を覗いてみましょう。

(以下、敬称略)

Q 本日は短い時間ではありますが、よろしくお願いいたします。

では早速、自己紹介をお願いします。

今田 工学部二回生の今田ひなのです。

今田さんの研究について

Q 今田さんが現在取り組んでいる研究はどのようなものですか。

今田 がんなどで長期入院している小児患者の生活の質の向上を目指して、「自立移動型点滴スタンド」の開発をしています。この点滴スタンドは、患者の位置をリアルタイムで検出・追従することで、患者が自由に動くための手助けをするものです。高校時代に身近な人ががんを患った経験から、患者が自ら点滴スタンドを押さなければいけないことへの負担の大きさを知りました。この問題の解決に貢献したいと考えたことから研究を始めました。

Q 高校時代から長くこの研究を続けているとのことですが、どのように研究活動を行ってきましたか。

今田 「神戸大学ルートプログラム」(*科学の分野を志向する高校生が将来国際的に活躍でき

る科学者や技術者を目指して大きく成長してゆくための教育プログラム)には、高校生でありながらこの研究課題に実際に取り組みたいという思いで参加しました。新しい環境へ飛び込むことに不安はありましたが、大学の先生や研究にひたむきに取り組む同世代の友達に出会えるきっかけとなり、とても良い経験になりました。

Q 大学に入学したのちに「ゴールドリボン助成金」(*「小児がんの治療率向上もしくは小児がん経験者の生活の質の向上」のための研究の促進を目的に実施)に採択され、奨学金を受け取られていますよね。応募しようと考えたきっかけはどのようなものでしたか。

今田 「神戸大学ルートプログラム」が高校生活と共に終了してしまつたので、それに代わる支援を受けられる助成金を自主的に探していました。支援していただいた助成金は、点滴スタンドや台車などの資材の購入や学会での発表の際に活用させていただいています。

Q また、「ソニー・バトンプログラム」(*理工系女子学生を対象にした奨学金支援と次世代のSTEAM GIRLSにバトンをつなぐプログラム)にも参加されていますよね。こちらの活動を知ったきっかけはどのようなものですか。

今田 授業中に先生から案内があり、その後ホームページで詳しく調べて興味を持ちました。学費に対する金銭的な支援はもちろんのこと、ソニーの社員の方々や他の奨学生と出会えたことが自分にとって大きな経験となりました。これらの出会いを通じて得た刺激を、自身の将来の進路や挑戦にしっかりとつなげていきたいと考えています。

Q こちらのプログラムでは実際にどのような活動をされているのですか。

今田 今年の冬頃に、中高生に向けてオンラインで座談会を開催して、悩み相談に乗ったりしました。その際に、自分の経験が中高生の悩み解決に一役買ったことがとても嬉しかったです。

Q 高校時代からの研究活動の中で、自分自身が最も成長したと感じることはどこですか。

今田 はじめは、「自分が」こうしたいという思いで行動することが多かったのですが、研究を進めていく中で段々とその製品を使う人の視点に立てるようになりました。そうすることで、使用する環境やその人たちの思いに寄り添ったアイデアを考えられるようになったと感じています。実際に当事者に使用してもらえる場面はまだ少ないですが、「病院」という場所の特性を考慮したり、医療従事者の方々にアドバイスをいただいたりした経験があります。

Q 研究をしていると、すべてが順風満帆というわけにはいかないですよね。そんな時はどのようにモチベーションを保っているのですか。

今田 学会や展示会に参加した際に同世代

ではなく、「芸術」的な視点を取り入れた幅広い学びを提供しているところに惹かれ、ヒトの感性や社会の繋がりを意識しながらモノづくりに取り組めると考えました。また、女性が中心となって活躍できる「工学」分野の新しい形を模索しているところに、ここでも自分らしく「工学」を学べると感じられました。総合型探究力入試『Q』のキューブ型で受験をしたのですが、比較的早期に合格が決まるので、卒業までの時間を研究発表などの時間として有効活用できた点も良かったと感じています。

Q ニー二二年に新設された奈良女子大学工学部には、受験当時まだ一人も卒業生がいませんでしたよね。出来立てほやほやの学部に進学することは、今田さんにとって大きな挑戦だったのではないですか。

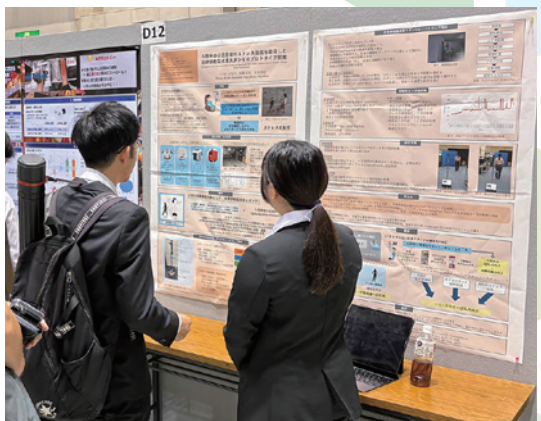
今田 確かに不安はありました。ですが、「だからこそ」と言っているんですが、自分たちが新しい道を作っているという前向きな気持ちで入学しました。

Q 奈良女に入学されてちょうど一年ほど経ちましたが、大学生活に対する率直な感想はいかがでしょう。

今田 先生との距離が近く相談しやすい環境が整っていて、毎日充実しているなと感じています。何より、自分と同じように熱心に「工学」の学びに取り組む仲間がいることで刺激をもらえています。

Q 少人数だからこそ学びが深まっていく感覚は、奈良女生なら誰もが持つものなのかもしれないと思います。

先ほど、「先生との距離が近くて良い」と



学会での発表

の大学生や企業の発表に触れることで良い刺激をもらっています。また、友達との時間を作って楽しむことでリフレッシュすることもよくあります。

Q では最後に、今後の研究の展望をお聞かせください。

今田 点滴スタンドで患者が自由に動くための手助けをするだけでなく、つらい入院生活が楽しくなる付加価値を追加したいです。リハビリテーションへのモチベーションにつながるようなものや点滴スタンドのカスタマイズ機能などを検討しています。

大学生生活について

Q 奈良女子大学を志望した理由はどのようなものですか。

今田 STEAM教育に力を入れていることに魅力を感じました。「工学」の分野だけ

仰っていました。指導教員の佐藤先生は今田さんにとってどのような存在ですか。

今田 佐藤先生はお忙しい中、私の研究活動をとても良く支えてくださいます。最近高校生の時にはあまり触れていなかったハードの実装に取り組んでいるのですが、うまくいかないことも多くて……。そんな時に的確な助言をしていただけるのでとてもありがたくなっています。もちろん、私の意見も尊重してくださいますよ。

Q では最後に、今田さんが考える「工学」ひいては「理系」の魅力を教えてください。

今田 私は、「想像をカタチにする力」を持つことがこの分野の何よりの魅力だと考えています。

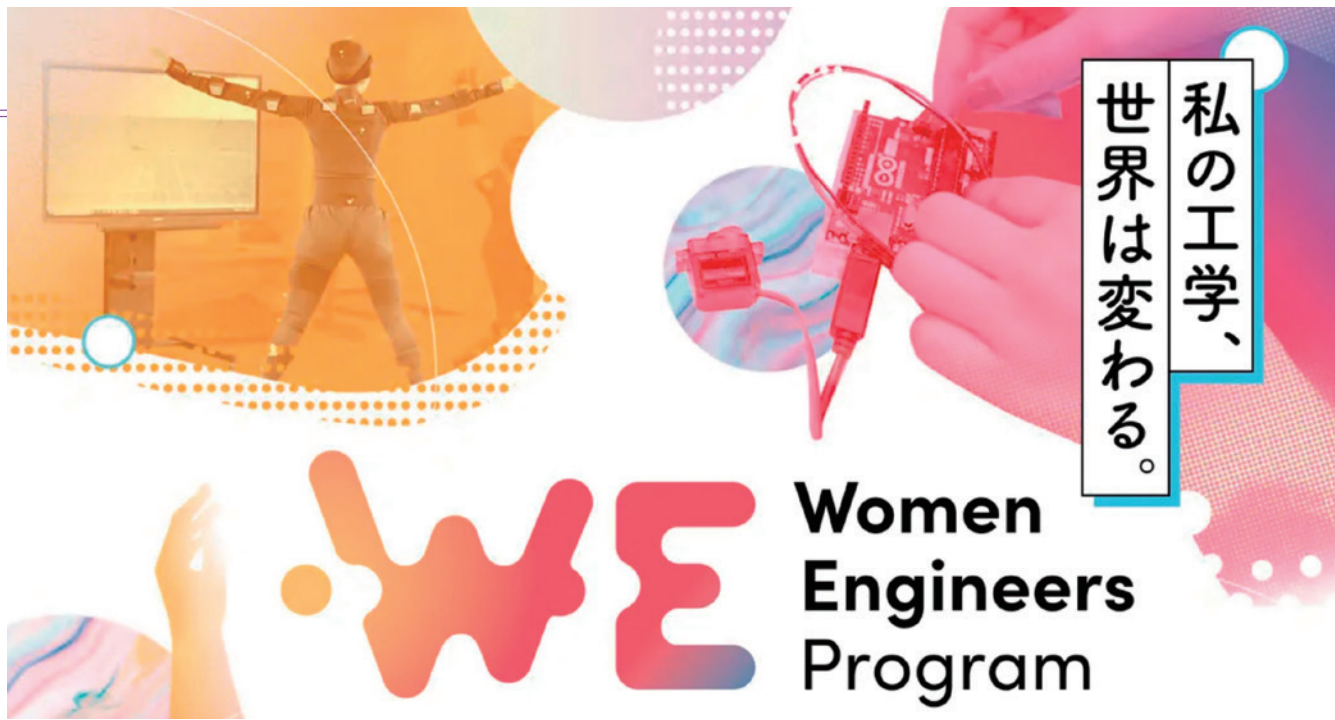
Q ありがとございました！

指導教員・佐藤先生へのインタビュー

Q 今田さんをサポートすることになった経緯を教えてください。

佐藤 今田さんがゴールドリボン助成金をもらうことになった時に、教員が支援する必要性を感じたことがきっかけです。教員の間で、学生一人での研究は難しいことも多いのではないかと、という話になり、ロボットやカメラなどハードウェアの分野を研究した経験のある私が、今田さんの研究に一番近いであろうということで指導することになりました。

Q 研究室に所属していない学生の指導は通常時とは異なると思いますが、どのようなサポートを心掛けていますか。



私の工学、
世界は変わる。

Women Engineers Program

WE Program

JR 東海でのワークショップに職員が同行しました！

令和6年8月22日(木)、本学の女性エンジニア養成プログラム「WE program」の一環として、東海旅客鉄道株式会社(JR 東海)主催のワークショップが開催されました。

会場となったのは、JR 東海の技術研究拠点・小牧研究施設(愛知県)。当日は、全国から集まった高校生・高専生・大学生15名が参加し、「新幹線の快適な乗り心地とは何か？」をテーマに、さまざまな実験設備を見学・体験しました。



はじめに訪れたのは「車両運動総合シミュレータ」。鉄道車両の揺れや走行感をリアルに再現するこの設備では、参加学生たちも身を乗り出して説明を聞いており、「本当に乗っているみたい！」という声も。続いて、走行中に発生する騒音や風の流れを検証する「低騒音風洞」、さらにグリーン車座席の構造比較体験など、普段見ることのできない設備や工夫に触れ、技術がいかに「快適性」と結びついているかを実感できるプログラムでした。

そして何より印象的だったのは、プログラム終盤に行われた「女性エンジニアとの座談会」です。JR 東海で実際に活躍されている若手女性社員の方々が、自身の進路や現在の業務

について率直に語ってくださり、それに対して学生たちが積極的に質問を投げかける場面が多く見られました。

「理系に進んだ女性が、実際にどのように働いているのかを知ることができてよかった」

「就職後のキャリア形成について、具体的なイメージを持つことができた」

といった学生の感想からも、このプログラムが今後の進路選択に与えた影響の大きさがうかがえます。

大学職員として同行していた私自身も、学生たちの素直な疑問や視点、そして何より目を輝かせて話を聞く姿に心を打たれました。今回のような「現場に触れる学び」は、教室では得られない気づきを生み、将来像をリアルに描くきっかけになるのだと改めて感じました。



最後に、JR 東海の社員の方が「今回のワークショップが学生の進路選択に少しでも役立てば嬉しい」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。

今後もこうした産学連携の取り組みを通じて、学生の背中をそっと押せるような機会を作っていけたらと思います。

WE Programについて

奈良女工学部は、2023年度から女性エンジニア養成プログラム「Women Engineers Program」を開催しています。ここでは企業による先端分野の紹介・技術演習および工学分野に興

味関心を持つ学生の交流の場となることを目的とし、中3～大学生を対象とした複数のワークショップを実施しています。なんと、参加費(交通費・宿泊費)は無料です。興味がある方はぜひ工学部のホームページをご確認ください。



想いをカタチに。 — 奈良女工学部で育む誰かのためのモノづくり —



自立移動型点滴スタンドとお二人

◎ 学生自らが助成金や奨学金で研究を行うというスタイルについては、どのような印象をお持ちですか。
◎ 佐藤 これに関しては素晴らしいことだと感じていますし、こういったスタイルがどんどん広まっていけばいいと思います。その一方で、先ほども言ったように授業との両立がとても大変です。時々「授業がなければもっと研究できるのに……。」と、もどかしさを感じています(笑)

◎ 佐藤 一番難しいと感じるのは、授業と研究の両立です。「研究を頑張るすぎて単位が足りず、学部四年間で卒業できなかった」なんてことにならないために授業をきちんと受けるのは大切ですね。そのうえで、時間のやりくりをしっかりと意識して、空いている時間に研究を進められるようにサポートしています。

奈良女子大学における 教育環境や理系女子の支援

◎ 女子大で工学を教えるやりがいとはどんなものですか。

◎ 佐藤 社会からの期待をひしひしと感じながら、教育に携われるところですかね。奈良女に工学部が設置されると決まってから、その時々々の工学部の様子や在学生の希望進路について、企業などから質問される機会が多くありました。社会からの女子大工学部に対するまなざしの熱さを日々感じています。

◎ 佐藤 先生は、佐藤先生の考える、女子が理系分野を専門的に学ぶことの社会的意義は何でしょうか。

◎ 佐藤 世間には様々な意見があるのですが、個人的には「変な壁」みたいなものが取っ払われることがすごく大きいと思っています。私の経験ですが、両親や親戚と話をしていて「男性だから」「女性だから」という話題が出るのがよくあります。理系に限らず、「女性は大学院なんか行かなくていい」なんて話を聞くとさみしいです。そういった家庭は、日本にまだまだたくさんあるでしょう。理系分野に進みたいという女子生徒の意志とは裏腹に、まだまだそれを許すことができない世間の風潮があります。男性だけだった「工学」の世界に少しずつ女性を増やすことで、社会の意識を変えていくことができるのが、最も重要なポイントだと考えています。

◎ では、「理系」を志す女子中高生向けに何か活動を行っているのですか。

◎ 佐藤 はい、奈良女工学部として、全国の中高校生や学部生向けにワークショップを開催しています。このワークショップは、「理系」を志す多くの仲間に出会えることや、自分の中にある興味・関心を確かめることができるという点で非常に有意義なものです。なんと、交通費や宿泊費の支援もあるので、全国各地から参加していただいています。

◎ では最後に、「奈良女工学部」だからこそ強みを教えてください。

◎ 佐藤 様々な分野を融合的に学べるのが強みだと考えています。現状一つの分野だけで解決できるような社会課題というのは少なく、ほとんどが複数の学問分野にまたがって解決を目指す必要のあるものです。そういった現状において、工学の分野を広く融合的に



WE Programでのソニー株式会社によるワークショップ

学生記者の声



私は縁遠い「理系」の世界に触れてみたいという思いから学生記者に立候補しました。研究室の壁一面に収納された資料に圧倒されながらも、笑顔が素敵な今田さんのおかげで和やかに取材を終えられました。今回の取材で、同じ大学にいながらもこれまで全く知らなかった「理系」の世界の学びや工学部の魅力を発見することが出来ました。ぜひ皆さんも、普段はなかなか足を踏み入れない分野に目を向けてみてください。思いがけない発見や新たな興味が、すぐそばにあるかもしれません。

三好 芳佳(みよし ほのか)

文学部 言語文化学科3年生
出身校:兵庫県立御影高等学校(兵庫県)

◎ ありがとうございます！
学んでいるということは大きな力になると考えています。また、奈良女工学部は大学院の設置を目指しています。そこでは分野横断的な学びを生かしつつ、それぞれの学生独自の分野を切り拓くような研究ができることを目標にしています。

Introduction to Master's Studies

大学院へ
ようこそ!

物理学コース



理学部 数物科学科
物理学コース
准教授

下村 真弥

しもむら まや

奈良女子大学理学部卒業後、学部では理論研究、大学院では実験研究に転向し筑波大学で修士・博士を取得。筑波大学の研究員を経て、アイオワ州立大学で研究員として渡米。産休2か月で早期復帰。帰国後はKEK助教、奈良女子大学着任。3児の母。2022年8月～2024年3月は助成を受けてアメリカで研究し、現在准教授。

先生の研究されているクォーク・グルーオンプラズマとは何ですか

クォーク・グルーオンプラズマ（以下QGP）は、ビッグバン直後の宇宙に存在したとされる物質です。宇宙誕生直後にあったと考えられており、私たちは巨大な加速器で原子核を衝突させて、この物質を実験室で再現しようとしています。実験では、アメリカのブルックヘブン国立研究所のRHICやヨーロッパのセルン研究所のLHCと呼ばれる大型加速器を用い、原子核を光速近くまで加速して正面衝突させます。その瞬間、極めて高いエネルギーが狭い空間に集中し、QGPの状態が一時的に作り出されます。この実験は、宇宙誕生の瞬間を再現する貴重な機会となっています。

原子とクォークについて

原子は、中心の原子核とその周りを回る電子でできています。原子核は非常に小さく、原子の質量の大部分を占め、陽子と中性子から構成されます。これらはさらに小さな粒子、クォークから成り立っています。クォークは物質の最小単位とされ、その性質を理解することが研究の重要な目標です。クォークはグルーオンという粒子で強く結びついており、常に2つ以上でペアを形成しています。クォークを単独で取り出すことはできず、引き離そうとすると新しいクォークが生まれます。

巨大な加速器で原子核を衝突させると、QGPが生成され、クォークやグルーオンの性質を詳しく調べることが可能になります。

研究では、QGPの性質、特にその流体的性質や粘性などを調べています。また、クォークがQGPの中を通過する際にどれほどのエネルギーを失うのかも測定しています。これにより、ビッグバン直後の宇宙の性質について、新たな知見を得ることもできると考えています。

留学経験はご自身の研究や考え方にどのような影響を与えましたか

学部3回生の時、英語が得意でなかったため、将来のために思い切ってアメリカ留学を決意しました。最初は語学留学として半年間英語を学び、その後、現地の大学に編入し物理の授業を受けることを目標にしました。留学は私の人生の中で最もやって良かったことの一つです。異なる文化や価値観に触れることができ、考え方の幅が広がりました。それが後々、国際的な実験や他国の研究者と議論する際に非常に役立っています。

若いうちに外国に行くことで、英語力以上に、全く違う文化や常識を持つ人々と接し、自分の視野や考え方を広げられました。

研究と家庭の両立について
伺ってもよろしいですか

私たちの実験はアメリカやヨーロッパの大型装置を使用するため、実験に参加する際は泊まりがけの出張になります。そのため、夫と私で子どもたちのサポートを分担し、研究と家庭を両立させています。夫も同じ分野の研究者なので、



米国BNLにて実験装置の前で準備中の下村先生

お互いの状況を理解し合いながらやりくりしています。現在、夫は長期でアメリカに行っているため、私は3人の子どもを育てながら研究に取り組んでいます。
子育てと仕事のバランスについて、日本と海外でどのような違いを感じられていますか

アメリカでは子育てを第一に考える文化が強く、男性も積極的に育児に関わります。日本では、子育てに対する期待がまだ性別によって分かれていると感じます。日本で男性が育児のために休むと驚かれることがありますが、海外ではその考え方がもっと自然に受け入れられています。子育てと仕事を両立できる環境を整えることは非常に重要だと思います。

大学院で学ぶ魅力は何ですか

大学院ではまだ誰も答えを知らないことを自分で調べ、研究できます。学部4

年生までの実験では、すでに答えがわかっていることを確認するものが多く、実験の練習という側面が強いですが、しかし大学院では自分でテーマを設定し、課題解決に取り組むことで未知の問題に挑戦する方法を学びます。特に修士課程では、2年間かけて新しい知識を深め、本格的な研究を進めます。学部の卒業研究でも未知の課題に取り組みますが、期間が短く入り口段階です。一方、大学院では時間をかけて未知の領域に挑戦し、論理的思考を鍛えることができます。これは研究者としてだけでなく、社会に出てからも役立つ重要なスキルです。

奈良女子大学で物理学を学ぶ魅力は何ですか

奈良女子大学で物理学を学ぶ魅力の一つは、女性が主体的に学び、研究できる環境があることです。物理学の分野は男性が9割を占め、無意識に役割が固定されることもあります。しかし、本学ではリーダーやサポート役が性別に関係なく適性で自然に決まるため、性別にとらわれず純粋に物理学に向き合えます。また、教員と学生の距離が近く、特に大学院では少人数制の中で丁寧な指導が受けられる点も魅力です。学生一人ひとりをしっかりと育てようとする姿勢があり、研究に集中できる環境が整っています。こうした手厚いサポートの元、物理学を深く探究できることが、本学ならではの特長です。

先生がQGPの研究をしようと思われたきっかけは何ですか

この質問、実は結構難しいんです。もしもこ

研究者になることに悩まれたことはありましたか

博士論文の執筆中、「このままでいいのかな？」と悩み、民間への就職活動を少し行いましたが、その結果やっぱり研究を続けたいとの結論に至りました。研究者になると自信を持っていたわけではなくありますが、不安を抱えつつも「なんとかなるだろう」と感じていたように思います。今では、当時よりも修士・博士の価値は高まっており、進学できるなら少なくとも修士課程までは行くことを勧めます。理系・文系の違いはあるかもしれませんが、研究を通じて身につく論理的思考や問題解決力はどんな分野でも役立つと感じています。たとえば、QGPの知識が他分野で直接役立つとは限りませんが、研究過程で養った考える力や解決力こそが本質的な価値だと実感しています。



学生記者の声



子育てと研究を両立されている下村先生の姿に、深く感銘を受けました。これまで理系の分野にはあまり触れてきませんでしたが、先生のお話を伺う中で、物理学の世界の奥深い魅力に引き込まれていきました。文系・理系という枠組みにとらわれることなく、より広い視野で学びを深めていきたいと思います。

田中 葵(たなか あおい)
文学部人間科学科 教育学・人間学コース 4年生
出身校：滋賀県立膳所高等学校(滋賀県)

奈良女子大学・大学院で物理学を学ぶたい学生へメッセージをお願いします
奈良女子大学・大学院では、魅力的で多様な研究の機会が豊富にあります。特に私たちの分野では、国際的な実験に参加でき、様々な知識や経験が得られます。じっくり研究に取り組む中で、論理的思考力も身につけられる環境です。私も忙しい日々の中で学生と共に研究を進めています。学生たちは真面目で賢く、私自身も多くの学びを得ています。新しい発見の面白さを共有しながら、皆さんと一緒に研究できることを楽しみにしています。

Introduction to Master's Studies

生活情報通信科学コース

大学院へ
ようこそ!



生活環境学部
文化情報学科
生活情報通信科学コース
教授

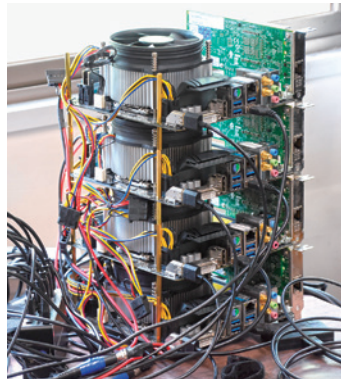
松本 尚

まつもと たかし

生活環境学部の学部長として、「世の中を便利に幸せに」という生活者目線でも考えています。そういった研究促進のお手伝いができたらいいなと思っています。

大学院での研究生活を通して どのような力が身につきますか？

大学院に進学しないと本格的な研究ができません。なぜなら学部で実際に研究を始めるのは、どの研究室も4年次になってからで、授業と卒論を教員の指導範囲内で少し手を動かす程度で終わってしまうことが多いからです。自分で思いついたことを試すのは、大学院に行ってからだと考えています。大学院での深い研究経験は、社会に出て働くときに応用できます。研究をする中で周辺のことも調べ、知識もどんどん広がります。「困ったときはこんなふうに解決したな」という経験がいつか役に立ってくれるはずです。大学院に進学して、高度情報専門人材になり、日本の社会を支えてくれることを期待しています。



省スペース省電力の自作並列計算機

奈良女の大学院で学ぶ良さや強みは 何でしょうか？

女性のロールモデルがたくさんいることですね。卒業生には有名な企業の開発職で働いている人もいます。自分の行きたい企業や職種で活躍している先輩がいると、励みになりますよね。共学では、まず男子学生と競争して勝ち残っていかないとけないという雰囲気があるかもしれません。そういうところで女子の方が身を引いてしまうこともありすが、それが女子大には少ないと感じます。共学で女子枠を設けても、いまだ男性社会の部分も多く、男性の目を気にするというのは、本当のジェンダー平等ではないと思います。生活環境学部の教授は女性の方が多く、女性リリーダーを育てる環境にあります。主体的に何事にも取り組める環境の中で、しっかりと自分の意見を主張することができ、活躍している女性の先輩方を見ながら進んでいけるところが良さや強みだと思います。

情報通信分野の未来について、 どのようなビジョンをお持ちですか？

AIの進歩により、ますます便利になっていくと思いますが、人間を超えるかというところではないかと私は思っています。もちろんコンピュータの計算スピードや記憶力は人間より優れていますし、最近流行りの生成AIは驚くような文章を作ることでもできます。しかし、生成AIはインターネット上の情報で学習しているので、ネット上にないような少し捻った問題では歯が立たず、AIの出した答えが本当に正しいのかを見極める

生活情報通信科学コースの特長は どんなところですか？

情報や通信に関しては、工学部の情報工学科や理工学部の情報学科と同じレベルのことを学びます。ただ、これらの学部と違うのは、文系からでもわかるように基礎的なことからスタートするところです。実際、研究室には文系出身の学生が半分くらいいます。学部を終えて修士課程まで進学すると、大手企業の研究職に就く学生もいるので、文理問わず学びを深められるのがコースの強みです。

先生が研究されている分野について 教えてください

子供の頃から電子工作が大好きで、コンピュータをICの基板から自作していました。大学では好きな物理とコンピュータを学び続け、就職後は企業の研究所で並列計算機の開発を専門にしていました。そこでオペレーティングシステムが必要になり、複数の計算機を束ねて動くシステムを作り始めたことが今の研究につながっています。

現在研究室の学生が主に取り組んでいるのは、深層学習（ディープラーニング）で画像処理をし、物体検出や流行抽出をすることです。その中でもOCRに力を入れています。

OCRとは、手書きや印刷された文字を読み取り、デジタル上で扱える文字データに変換する技術です。これまでは、どこに文字があるかを事前に調べて1文字ずつ文字を検出していました。一度に多くの文字を検出できるようにしました。効率が上がリ、精度も出ていま

必要がありますね。

また、一部の企業がシェアを奪い合って利益を独占するのではなく、みんなが幸せになれるようなスキムを作ることに関心があります。それは情報技術だけの話ではなく、社会のあり方そのものにも関わってきます。そのため、ただ技術を極めるだけではなく、生活環境学としても文系の学問を取り込んで、どういう制度にしていけばよいのかということまで考えていきたい。そして世界中のみんなのウェルビーイングが高まるような方向に行けばいいなと思っています。その技術的な側面として情報通信技術を使って支えていきたいです。

情報学に興味がある学生に「今のうちに やっておいてほしいこと」はありますか？

なんでもよいから自分でやってみてほしい。「プログラムを作る」でも、「Webページを作る」でも、「動画編集をする」でもなんでもよいです。そして、自分が作ったものが動くという喜びを味わってほしい。一からプログラムするのもいいですが、それはとても大変ですし、人が作ったプログラムを組み合わせて、自分のアイデアを実現するなどしてチャレンジしてくれると嬉しいです。

最後に学生へメッセージを お願いします

女性だからと遠慮せず、主体的になんでもやってほしい。そして、何かが行われていたら、その裏にある仕組みまで想像してみたい。私はいろいろな経験を重ねる中で、世

す。早く実用レベルにして一般公開したいなと思っています。

また、物体検出を速く行うことにも力を入れています。自動運転で人を認識すると自動的に停止させるなど、カメラで写したものが何であるかをリアルタイムで判定する研究をしています。持ち運びができるリアルタイム物体検出器という形で車に搭載できるようなハードウェアの研究開発もしています。

情報通信科学を学ぶことで、 社会で貢献できるどのような人材に なれると思いますか？

ICTで便利な社会になり、スマートフォンでも色々楽しんでいますよね。それをより良い方向に進めたいと考えています。生活環境学部では「ウェルビーイング」と言っていますが、永続する幸福度を高めるためにICTを使いたいのです。今の資本主義社会では、自分のグループ企業のウェブに注目させて、「ポイントあげますよ」とか、「サービスが使えますよ」といったことに情報技術が使われているような気がしています。そうではなく、みんなが幸せになる方向でどうすれば情報技術が使えるのかと考えています。あとはデジタルディバイドをなくしていけるということです。情報技術を使って、お年寄りやスマートフォンをあまり使いこなせていない人たちにも、便利でより幸せに生きやすくなるような支援ができると思います。

学生記者の声



取材を通して、普段の授業ではなかなか聞くことのできない先生の考えや、研究への想いを伺うことができました。大学4年目となる今、改めてこの大学で学ぶことの意義や魅力を再認識しました。これからも主体的に学びを深めていきたいと思っています。

川口 紗矢(かわぐち さや)
生活環境学部文化情報学科
生活情報通信科学コース4回生
出身校：光泉カトリック高等学校(滋賀県)

の中にはいろいろな人がいるということを知りました。コンピュータやプログラムの仕組みを理解するのはもちろん、世の中の仕組みも理解し、それに振り回されない良い人生を歩んでください。私は高度情報専門人材を世の中に送り出していきたいと思っています。生活情報通信科学コースに来てくれると嬉しいです。そして様々な企業にもチャレンジして活躍してくれたら、後輩たちにとっても励みになると思っています。『チャレンジすれば、チャンスはあります。』



国際戦略センター教授 Interview

教室から世界へ。 自己変革を促す国際教育とは何か

国際戦略センターの橋田 力教授は、豊富な海外実務経験を活かした「ヨーロッパ学入門」や「Global Citizenship Seminar」など、国際的な視野を養う授業を担当しています。教室の空間を超えて、広く世界について考え自分自身を見つめ直す—そんな授業を受けた学生たちは、何を感じ、どう変わったのでしょうか。今回は、先生に語っていただき、実際に授業を受けた私の印象も交えて記事を書きました。

授業から生まれる 多角的な視点

橋田先生の専門は、国際関係論の中でもヨーロッパ統合論。大学では「ヨーロッパ学入門」や「国際機構論入門」、英語による「Global Citizenship Seminar」などの授業を通して、学生たちに「世界の捉え方」を伝えています。

「ヨーロッパ学入門では、高校の世界史で学んだ基礎知識を活かしつつ、身近なトピックから国際社会への理解を深めます。臨場感を大切に、現地ニュースや動画教材も活用しています」

言語や文化など身近で旅行先でも応用できそうなトピックから、外交や政策、経済などコアな部分まで幅広くヨーロッパに関する教養が学べて面白い授業です。

特に力を入れているのが、英語で行う「Global Citizenship Seminar」。国内学生と外国人留学生が共に議論し、多文化の中で学び合う国際共修の場です。

教室の中で「世界」を 体感するには?

多文化理解や国際的視野を養うため、橋田先生は授業の構成にも工夫を凝らしています。

「例えば、『日本とは異なる見方』に出会ったとき、なぜそうなるのかを背景から丁寧に説明します。今の世界は『多極化』が進んでいまして、日本や自分自身を相対的に見つめ直す力が求められるのです」

授業では、海外からのゲストスピーカーを招いたり、グループディスカッションを取り入れたりと、学生が「主体的に考える」仕掛けが随所に。単に教員から一方的に知識をインプットするのではなく、学生からの問いや意見などを促し学生同士のアウトプットから新たな課題や解決を導いていきます。

学びの中で 「自分が変わる」

また、「Global Citizenship

「海外に行く」 ＝「世界とつながる」 ではない?

最後に、「海外に行くのが不安な学生へ」と尋ねたところ、こんなアドバイスが。

「経済的な理由や不安があっても、海外に行くことが難しいと感じる学生もいると思います。でも、本学のキャンパス内にはすでに外国人留学生がいます。英語での共修授業や、国際空間CotoQue（ことーく）など、学内でのさまざまな国際交流イベントを通じて『世界と出会う』ことはできます」

また、外国人観光客が多く訪れるゲストハウスなどの滞在や観光案内のボランティアなども、身近な国際体験としておすすめのこと。

学生へのメッセージ

「どんな小さな興味からでも構いません。少しでも心に引っかかるものがあつたら、その『引っかかり』を、ぜひ大切にしてみてください。大学の4年間は、自分の時間を比較的自由に使える貴重な時期です。たとえば、興味がある本をじっくり読んでみる。行ってみたい場所に出かけてみる。

今の自分の時間を大切に、ふと心に浮かぶ『なぜ?』に向き合う習慣をつくってください。きっとその先に、世界とつながるヒントがあります」

世界とつながる 学びのカタチ

担当教員・外国人留学生・国内学生の声からひもとく奈良女の今



「国境を越える」とは、 思考の枠を広げること

「Seminar」に参加した1人の日本人学生が印象に残っていると。当初は発言をためらっていた学生が、次第に積極的に議論に加わり、自分の意見を堂々と述べるようになった姿に、確かな成長を感じたそうです。

「授業が終わったあとも、学生同士が意見を交わしている様子を見ると、違いは間違いではなく、多様性を活かした主体的な学びは、ここから始まるような予感があります」

国際的な舞台で 活躍するために、 学生に求めたい力

国際交流の場で活躍するには、「語学力」や「異文化理解」だけでは足りません。

「相手の背景にある文化や歴史を知り、できる限りその人の視点から考える。信頼関係の構築には、率直に、誠実に、関わる姿勢が大切です」

先生が挙げた必要な素養は、

- 俯瞰的な視点と判断の一時保留
- 英語など外国語による簡潔で相手に理解される表現と相手の国や文化に関する知識
- 誠実さと柔軟性

など、どれも「人と人として、向き合う」姿勢が根底にあるものでした。

奈良女子大学国際空間 CotoQue (ことーく)

CotoQueでは、いろいろな国の言葉や文化に触れられるイベントを行っています。

イベント以外の時間も、日本人学生や留学生が気軽に集い、交流を行う場として活用できます。また、多言語で日本映画を上映するほか、外国語ニュースや留学生活の映像などを流しています。CotoQueは、学内でここに来たら国際的なもの(言語・文化)に触れられる!という空間です。

キーワードは「グローバル」「多言語」
「異文化理解」そして何よりも「楽しく!」



過去一年で奈良女から留学した
国内学生の人数 **268人**



ボドン マリーさん(フランス出身)

「関西弁」という壁。でもその先にあった学び

印象的だった授業は「Japanese Contemporary Society」。日本の現代社会について、学生同士で議論を交わすこの授業では、他の学生の価値観や考え方に触れ、社会の構造や文化の背景をより多角的に知るきっかけになったと言います。

一方で、最初の頃は関西弁に戸惑うことも多かったとか。「教科書で習う日本語と違って、今の何で言った?」と聞き返すことも多かったと、と振り返ります。でも、今では日常会話のなかで自然と使えるようになり、日本人の友人とのやり取りもますます楽しくなったそうです。

「困ったときは、遠慮せず助けてって言うこと。それが一番大事だと気づきました」

氏名: ボドン マリーさん(文学部)
出身地: パリ(フランス)
留学制度: 交換留学
滞在期間: 2024年10月~2025年7月(約10ヶ月)
履修内容: Japanese Contemporary Society、日本語上級、日本史 など

奈良女子大学の
国際交流協定提携校数 **56校**

ヨーロッパ	9校	オセアニア	3校
中東	3校	北アメリカ	2校
アジア	39校		



学生記者の声 ……………

取材を通して奈良女子大学での国際交流や留学の魅力を発見することができました。この記事を通して少しでも国際交流に興味を持ってもらえたら嬉しいです。

植田 胡春(うえだ こはる)
生活環境学部 文化情報学科 生活文化学コース2回生
出身校: 静岡県立浜松北高等学校(静岡県)

世界とつながる 奈良女マップ

—— 奈良から世界へ、世界から奈良へ ——



波山 慎子[バザン シンコ]さん(スペイン出身)



“女子大だからこそ”感じられた安心と、学びの自由

小学生の頃から日本語に興味を持ち、いつか日本に行ってみたくて夢を描いていた波山(バザン)さん。スペイン・バルセロナから奈良女子大学にやってきた彼女は、今、日本語だけでなくAIやプログラミング、サッカーまで、多彩な経験を積んでいます。

「女子だけの空間」がくれた、心の余白

進学先として奈良女子大学を選んだ理由は、国立大という安心感と、“女子だけの環境”への直感的な魅力でした。「情報科学のように男子が多い分野こそ、女子大の空間が安心できる」と感じたと言います。

関東の大学とも迷ったものの、奈良女子大学のキャンパスを訪れたときの“温かく活気のある雰囲気”に心を動かされ、入学を決意しました。

最初の半年間は、まだ友人も少なく孤独を感じる時期もあったようですが、夏以降、他の留学生やクラブ活動での出会いが支えとなり、少しずつ心を開けるように。

「女子大の人間関係は、ストレートで裏表がなくて、とても心地よいです」

「安心して自分らしくいられる空間です」

フェミニズム、責任感、そして未来

奈良女子大学の学生たちが自然に学業・部活・アルバイトを両立している姿にも驚いたという波山(バザン)さん。

「みんな、ちゃんと“自分のことを自分でマネジメントしている”感じがして、すごく刺激になりました」と語ります。

また、学内にはフェミニズムへの理解や女性のキャリアを後押しする空気があることも印象的だったと言います。

「奈良女子大学は、私にとって“フェミニストの理想郷”！」

卒業後は日本での就職や、大学院進学も視野に。日本語の学びにとどまらず、それ以上の居場所と可能性を見つけた時間になりました。



氏名: 波山 慎子[バザン シンコ]さん(生活環境学部3回生)
出身地: バルセロナ(スペイン)
留学制度: 正規留学 滞在期間: 2023年4月~
履修内容: 情報科学(AI・プログラミング) など
部活・サークル: サッカー部 など

な中で出会ったのは、「言葉が思うように通じなくても、あなたのことを理解したい」という友人たちの姿勢でした。

「ぶつかったもいい、自分の意見を言っていんだって思えるようになった」

日本では「空気を読むこと」に慣れていた自分が、ベルギーでは「自分の考えを伝えること」の大切さに気づき、発信することに躊躇しなくなったと話します。

“自分で決める人生”へのシフト

もともとは、「なんとなく就職」とりあえず卒業と思っていたという平山さん。しかし留学を通じて、「自分の人生は、自分で決めていいんだ」と実感。

氏名: 平山 紗帆さん(文学部4回生)
渡航先: ルーヴェン・カトリック大学(ベルギー)
留学制度: 交換留学
滞在期間: 2024年9月~2025年6月(約10ヶ月)

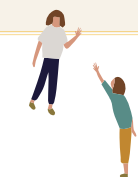
就職するという方向性は変わらないものの、「安定」ではなく、「自分らしく働ける場所で働きたい」という思いが強くなったそうです。

「ベルギーの快適な生活を離れるのは少し寂しいけど、これから自分で考えて動いていきたい」

後輩たちへ

「少しでも迷っているなら、行ってみてほしい」——平山さんはそう語ります。

「卒業が延びても大丈夫。それ以上の“経験”と“発見”があるから」と笑顔で伝えてくれました!



奈良女子大学に在籍する
留学生の人数 **117人**



近藤 志帆さん(台湾)



「行ってみたら、案外なんとかなる」台湾で出会った新しい自分

「留学って、特別な人がするものだと思っていました」

そう話す近藤志帆さんは、奈良女子大学の交換留学制度を利用し、台湾大学への約一年間の留学を経験しました。

中国語を学びたいという思いから挑戦した台湾留学は、語学力はもちろん、国際感覚や将来のビジョンまでも広げてくれたと言います。

「制度が整っているから、ここから行けるかも」と思ったことがきっかけでした。直前には南京大学の短期研修(オンライン)にも参加し、中国語での会話に自信を得たことが背中を押してくれました。

2回生の秋にはHSK5級に合格。さらに民間の奨学金にも挑戦。勉強と準備の積み重ねが、「自分でも行ける」という自信につながりました。

「まさか2年でHSK5級が取れるとは。努力ってちゃんと実るんだと実感しました」

授業だけでなく部活にも参加し、現地の学生と同じ生活を送っていたと語ります。クラスメイトは台湾の学生だけでなく、マレーシア・アメリカ・シンガポールなど多様な国からの留学生たち。英語・中国語を交えたディスカッションを通して、自然とグローバルな感覚が身につけていきました。

異文化の“ズレ”が視野を広げる

体調を崩して病院に行くとき、言葉に不安があり、事前に中国語の説明をメモして持参したエピソードも。「これ読んでください!」とお願いした経験は、今では笑い話だそう。また、台湾の街にはゴミ箱が多く「便利だな」と感じていたのに、フランス人の留学生からは「全然足りない」と言われて驚いたと。

「人によって当たり前前って違うんだと気づけたのは、すごく大きな収穫でした」

将来につながった「等身大の挑戦」

帰国後は中国語を活かして卒論に取り組みながら、学内で中国語学習会を立ち上げるなど、後輩たちのサポートも始めています。大学院への進学も見据えつつ、留学・語学を活かせる海外に関わる仕事に就くことも考えていると語っています。

「台湾での日々が、“生き方”にまで影響を与えてくれました」

氏名: 近藤志帆さん(文学部4回生)
渡航先: 台湾大学(台湾)
留学制度: 交換留学
滞在期間: 2023年9月~2024年6月(約10ヶ月)
履修内容: 語学・東アジア文化・社会学・留学生向けセミナーなど
部活・サークル: ラグビー部

後輩たちへ

「完璧な準備じゃなくても大丈夫。行ってみたら、案外なんとかなります」

そう語る近藤さんの言葉は、「自分なんか無理かも……」とためらう誰かの背中を、そっと押してくれるはずだ。

佐保会 各支部リレー便り 全国47都道府県で活動



和歌山県支部 支部長 大谷 泰子
(昭和52(1977)年 文学部 史学科卒業)

佐保会和歌山支部は大学に近い近畿2府4県の中で最少の支部で、会員は200名たらずです。和歌山は温暖な気候で、私が住む御坊市近郊では、みかん、梅、豆類の他、ミニトマト、小玉スイカ、苺やメロンなど多くの農産物が栽培され、海の幸にも恵まれています。一方で、少子高齢、人口減少の波は近畿地方では最も顕著に表れていて、教育や保健・医療に課題が山積しており、南海トラフ地震と津波による被害の不安も尽きません。

佐保会和歌山支部の事務局は当初、和歌山大学に、その後も和歌山市周辺の紀北地区に置かれてきましたが、2018年にはじめて、御坊周辺の紀中地区の会員で事務局（支部長1名、事務局員2名）を担当することになりました。

主な活動は、毎年11月末に開催する支部総会で、その報告と参加者の感想などをまとめた「支部だより」を作成し、「today」や「佐保会報」とともに翌年2月に発送しています。話し合いや作業を行うのは事務局員の自宅です。

私たちが事務局を引き継いだ2018年の支部総会は和歌山市で行いましたが、2019年は、紀中地区の道成寺（日高川町）の見学を織り込んだ支部総会を企画しました。翌年からはコロナ禍となり、2020年、2021年の総会は中止に追い込まれ、2022年はコミュニティセンターでの茶話会になりました。

2023年にようやく、イタリアンレストランで、通常の支部総会を開くことができました。会員で書道家の中村眞由子さん（S56理化）に「私と書道」というテーマで作品も披露していただきながら、講演をしていただき、食事もしました。

昨年は、50年前に書かれた『青い壺』が70万部を越える売れ行きとなって注目されている、和歌山市出身の有吉佐和子ゆかりの「有吉佐和子記念館」（2022年創立）で総会を開催しました。恩田雅和館長の講演、記念館での食事、歓談のひとときを過ごすことができました。

支部総会の参加者は15名ほどで、会員の1割にも満たず、総会の出欠確認の葉書も返信されるのは3割ほどです。参加者は少ないですが、総会はいつも和やかで、近況と懐かしい話で盛り上がります。

課題はいろいろありますが、今後も、より多くの会員に参加してもらえるような魅力的な支部総会づくりを、心掛けていきたいと思っています。



▲ 2019 道成寺にて



▲ 2023 「私と書道」の講演



▲ 2024 有吉佐和子記念館にて

奈良女子大学なでしこ基金

令和6年度収支報告

皆様方によるなでしこ基金へのご理解のもと、令和6年4月1日より令和7年3月31日までの1年間に、15,473千円（古本募金398千円を含む）のご寄付をいただきました。心から、温かいご支援とご協力に感謝申し上げます。

令和6年度収支報告の詳細については、下記のページにアクセスしてください。

<https://www.nara-wu.ac.jp/nwu/intro/nadeshiko/report/>



なでしこ基金のリーフレット・払込取扱票を刷新しました！

このたび、本学の基金案内リーフレットと払込取扱票をリニューアルいたしました。

新しいリーフレットはピンクの花柄を基調にした華やかなデザインで、手に取りやすい仕上がりとなっています。払込取扱票はリーフレットに組み込まれ、必要に応じて切り取ってご使用いただける一体型となり、利便性が向上しました。

また、寄附の項目も一部変更されておりますので、以前の払込取扱票をお持ちの方も、新しいリーフレット添付のものをご使用ください。

皆さまの温かいご支援が、本学の教育・研究活動を支える力となります。今後ともご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



編集・発行 / 奈良女子大学広報企画室 星野聡子、永廣秀子、小川伸彦、吉岡英生、水原啓暁、芝崎学
編集責任者 / 室長 星野聡子

連絡先 / 奈良女子大学総務課 〒630-8506 奈良市北魚屋東町

Tel 0742(20)3220 Fax 0742(20)3205 E-mail somu02@jimu.nara-wu.ac.jp

“ならじよToday”へのご意見・ご感想を是非お聞かせください。より良い誌面作成のため皆様のお叱咤激励をお待ちしています。（編集部）

■バックナンバーはHPをご覧ください。▶ <https://www.nara-wu.ac.jp/nwu/intro/today/index.html>

公式 X



公式 Instagram

